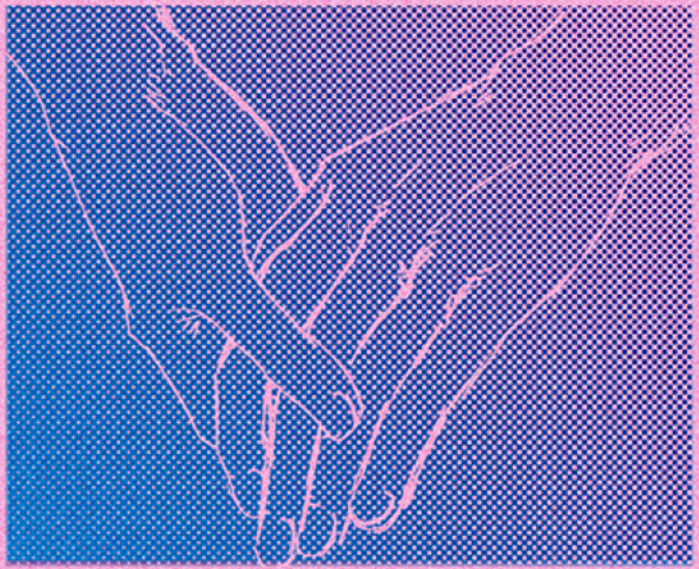
だからその手を取って



2006EarlyAutuum
Presents by L-poison
All writein by So Aisato
FOR ADLUT ONLY
Tuneabut Objection Fanbook No.34
naruhodo*miturugi

遠い星と
近くの君

この本は二〇〇六年九月に発行した
同タイトルの同人誌の
ダウンロード販売用バージョンです。
パソコンの画面で見やすいように、
横長の画面にレイアウトを変更してあります。
誤字脱字もだいぶありましたので、
その部分も同人誌版からいくつか
訂正をくわえてあります。

一枚めは販売時の表紙と裏表紙の画像です。
作品タイトルの入った画像は
今回新規に作成した分となっております。

こちらは体験版となっております。
実際のデータと同じ体裁になっておりますので、
参考になさってくださいませ。

1

食事をするのは久しぶりだ。
特にこの、目の前にいる男とは。
「…何を見ている」
御剣怜侍(みつるぎれいじ)はちらりと、目の前の男に視線をやった。向かい合わせに座っている男――成歩堂龍一(まるほどうりゅういち)は、それを見てひどく嬉しそうに目元をゆるめる。
「ん？」
少し首をかしげる仕草。そんな些細な動作にも懐かしさを感じる。自分もまた、同じように相手を見ていたのだ、ということを思い出した。
「また当分見られないかもしれないから、よく見ておこうと思って」
「…よくそんなことを言えるものだな」
「だって本当でしょ。…ところで、何頼む？」
御剣はさっきから、メニューを見てはいるが目が泳いでいて、字面をまったく追えていない。目線を落としてはちらちらとあたりを気にしては体の向きを変え、そしてまたしばらくすると同じことを繰り返した。
おかげで、目の前のメニューは、広げられてから、まだ一枚もめくられてはいなかった。
「……あ、……ああ、……そうだな、……ええと」
いつもは成歩堂よりも早くメニューを決めるか、じっと黙考したあとでやおらメニューを閉じてしまうのが御剣の常だった。しかし、今日はそんな様子は見られない。
どこか周りをはばかるようにして視線をさまよわせる御剣

の、ひさしぶり――――それこそほぼ半年ぶりに会う姿を、成歩堂は舐めるように見つめていた。かすかに、感じさせるかどうかの情欲を目元に滲ませながら。

御剣はまだ海外研修中だった。
日本を離れて、もう一年半になる。
その間、今までに三カ国を回っており、今度また別の国へ移動することになっている。
移動の際に一週間ほど、日本に戻った。
それは、研修の結果報告を、上司に届けるためとされていた――――名目上は。
しかし本当は、その帰国は御剣の現在の状況報告を兼ねた、上司への顔見世以外のなにものでもなかった。状況の報告だけなら、今は便利な方法がいくらでもある。
彼の人生のほとんどを支配していた、ある事件のほとぼりが冷めるまでは、どんなに優秀であっても、御剣は日本の法廷に立つわけにはいかなかった。
現在の検事総長は御剣の将来を高くかっていた。
組織での強力な後ろ盾を再び手に入れた御剣を、誹謗中傷する風向きは依然として強かった。だが同時にそれを黙らせる結果を、確実に御剣はその手にしていたのも、また同じように事実であった。
御剣を慕う部下は彼が思うよりも数多かった。
彼の判断力は常に怜悧で明晰であり、何より、犯罪を断罪しようという、強い意志があり、強い自制心があった。それは日常生活のあまりのおぼつかなさと相まって、非常に人を

ひきつける力があった。
御剣は社会に出たのが早かったが、目上の人間に対しては敬意を払うことを忘れず、観察力や記憶力が非常によかったので、侮りの視線を、すぐに感心に変えることが出来る力があった。
努力を怠らず、自分に厳しく、それを驕らなかった。
そんな御剣に心酔する人間は、庁の内外に多く存在した。

だが、彼は同時に極めて危険な存在でもあった。

――――――ＤＬ六号事件。

彼の人生に影を落す大きな闇は、いまだ彼の毎日に、確かな痕跡を残していた。
彼はその事件の被害者の息子であったので、世間の同情を得ることができる立場にいた。
だが同時に彼は加害者の弟子でもあったので、世間の謗りや不審を招くことも間々あった。
司法に関係する立場の人間として、この二つの立場は、御剣にとって諸刃の剣であることは、疑いようのない事実であることは確かだった。
そのあたりの内部事情を、成歩堂は本人から、直接聞いたわけではない。だが、周囲の噂で、御剣が日本に戻ってこない訳も、時折日本に帰ってくる訳も、そこはかとなく推し量ることが出来た。
それでも日本に戻ってくる時は、必ず成歩堂に連絡を取ってくれる。

わずかな時間でも、顔を見せてくれるようになった。
それだけでも満足するべきなのかな――と成歩堂は思うことがある。
いままでがある意味悲惨すぎた。
だから考えてみれば状態は好転している。
それは確かだ。
しかし、恋人同士として、それはあまりにささやかな喜びではないのだろうか。
せっかくの甘い蜜月を迎えることも儘ならず、年に数回程度しか、顔を見ることが出来ないということは――。
国内ならまだ、どうにかして会いにいく手立てもあるだろうが、ものが外国となると、そう簡単にはいかない。
しかも、こちらは土日祝日を保障されているわけではないしがない自営業者、休みが自由になるということは、休めないということの同義でもある。駆け出しの身では三日程度の休みを取って、異国の地にある御剣に、会いにゆくことすらままならない。御剣も、それを望んでいないだろう。
不満も不安も募るばかりで、メールも手紙も電話もすればするほど辛くなる。本当は、半端に会うことなんかしたくない――とすら思うことがある。
それは寂しさの裏返しに過ぎないことはわかっている。
わかっている――『会わない』という選択肢が、最初から存在しないことを思えば、理由は明白だ。
ひとめ顔を見るだけでもいい。
帰国の連絡を聞くたびに、そう思って時間を作る。
お互いに、そうして会うことを求めているのを知るのも、本当は嬉しい。

自分だけが会いたいと思っているのではないか――御剣が時間を作って顔を見せてくれることは、そんな不安をわずかでも埋めてくれる。

そうやって、肯定的に思うしかないだろう――――と、そこに、何度も、何度でもたどり着くのだ。

結果は出ているが、…しかしたぶんまだ、自分は完全に納得しているわけではないのだろう――――と成歩堂は思う。

だから何度でも、同じことを考えてしまうのだ。

会いたいのに会えない、この苦しさをどうやって、紛らわしたらいいんだろう？

お互いに好意を持って関係を重ねていて、感情は確かめあった――しかし、それとこれとは話は別だ。

難関の国家試験を突破して、さらに難関の国家公務員試験をパスし、自分の生涯の仕事として、宮仕えをしている御剣に、自分が会いたいからという我が儘で、現在の研修を蹴ってほしいなどという立場にないことは、成歩堂には百も承知のことだった。

まだ収入は自分のほうが不安定で、しかも事務所を手放して、御剣の後を追って外国に行く選択を、はなから一〇〇パーセント拒否している以上、同じことを御剣に求めることなど、当然出来る話ではない。

御剣自身もそんなことをもし言われたとて、即座に否定するしかないことであろうことは明白だ。その先をどうするのか、何のビジョンもないのに動けるような男ではない。

しかし、しかしそれでも思う――――御剣と、一緒に暮らす日々のことを思う――――毎日その姿を見て、声を聞いて、「おかえり」と言えること、彼に「ただいま」と言えることを考

える。
そんな日は、そんな——夢のような日は——果たしてくるのだろうか？

御剣が一時帰国する旨が成歩堂の元に届いてから、成歩堂はそんなこととつらつら考え続けていた。
それは、ちょうど一ヶ月前のことだった。

「…本当にこのまま食事をするのか？」
御剣は伺うように問う。
成歩堂はそれに、口角を上げて答えた。
それは時々御剣を震わせる、目だけ笑っていない笑みだった。彼の中の何かが、御剣に向けて強く、激しく動く時の顔だった。
それは光でもあったが、同時に闇でもある。
「そうだよ。おなかすいたでしょ？　ろくに食べないで一日中…二日間かな、ずっと運動してたのは同じなんだから。御剣だって、お腹すいてるんでしょ？」
その言葉に意味に、御剣は頬に朱を乗せる。
「上の口からも、ちゃんと食事しようよ。…下の口には、泡立って噴出すまで、いっぱいミルク飲ませたけど、さ」
「なっ……！」
成歩堂の言葉に、御剣の顔が赤くなった。
言葉の意味するところはわかっている。
わかっているが、そういう野卑た言葉を、人前で口に出すことには御剣には強い抵抗があった。

心臓が一気に心拍数を上げているのが聞こえるようだ。
「成歩堂、その、こういう場所で、…そのようなことを言うのは、…」
「なんにする？」
成歩堂はにこにこと笑いながら問いかける。御剣はまたメニューに視線を落とし、少し顔をしかめてはあたりを伺った。
「…お尻、そんなに気になる？」
落ち着かない御剣がはっと顔をあげると、ウエイトレスと目が合った。こちらに来ようとするので、小さく首を振る。
「まだ決まらない？」
「いや、…もう少し待ってくれ…」
御剣は懸命に思考をテーブルの上のメニューに持っていこうとした。
気をつけないと、膝が震えて姿勢が崩れそうだった。
そんなことをしたら、…自分は、声を上げることを止めることが出来ないだろうと御剣は思った。
体の中に異物を含んでいる、この状態では。